

大蔵谷の獅子舞～稲爪神社秋祭り～

毎年10月の大蔵谷の稲爪神社の秋祭りには、獅子舞や囃口流し、牛乗りが行われています。今年は台風19号の影響で例年宵宮(10月12日)で演じられる獅子舞や囃口流しが翌日の本宮の夜になるなど行事がいくつか変更になりました。

稲爪神社に伝わる獅子舞は、大蔵谷の獅子舞(県指定大蔵谷獅子舞保存会)と大蔵谷西之組獅子舞(大蔵谷西之組獅子舞保存会)があり、演目や荒神祓い(氏子の家を周り舞う)、獅子だんじりを使うところなどよく似ており、それぞれに継承されています。

○大蔵谷の獅子舞

『明石の文化財』によると、「大蔵谷の獅子舞(昭和54年3月県指定)は16世紀頃に当地に伝えられた。今日にいたるまで地元稲爪神社の氏子により、大蔵谷村の悪疫・災難払い、五穀豊穡祈願を行うものとして伝承されてきたものである。2人立ちの獅子と、ヒョットコ・オカメの面を被った男がスリササラ(竹などで作る楽器)を鳴らし、滑稽なしぐさをしながら、独特の囃子に合わせて演じる。また、獅子が3人立ちを行ったり、宮の石段で戯れるなどのひょうきんさがその特徴である。」とあり、特に**3人立ち**(肩車ではない3人継ぎ)は、県内獅子舞では他に見られない独特のものです。由来や伝承時期について様々な説がありますが、オヤマ(肩の上に立たせ歩く)など伊勢太神楽系の演目も多く演じています。

○荒神祓い、門つけ(氏子宅にお祓いに巡る)

宵宮や本宮では氏子の家を巡り、玄関先で獅子を舞ったり、謡ったりします。江戸時代、大蔵宿は山陽道屈指の宿場で、宝永元年(1704)には屋敷294軒、人口1781人、本陣旅籠61軒、馬46匹の記録があり、その繁栄は明治時代まで続いたようです。今では減ったとはいえ多くの氏子があり、いくつかのグループに分かれ、獅子舞も囃口流しも巡っています。本宮10月13日(日)大蔵谷の獅子舞の一行はマンションの玄関や多くの買い物客で賑わう魚の棚商店街でも舞っていました。大蔵谷西之組獅子舞は暗闇中、氏子宅前で最後にオヤマを演じていました。

囃口流し(明石市指定)は、約400年前に大蔵宿の中ほどの地区で始まった謡いが受け継がれたもので、仕事唄の「木遣り」を前唄に、独特な節回しの「囃口流し」を対にして、扇をかざして唄います。三味線、鐘、太鼓が調子を合わせ、流行り唄、尽し唄、甚句、花柳唄、遊里の艶歌、お座敷唄、歌舞伎、文楽演目、謡いなどを元に創られています。

○兵庫県内の獅子舞について

平成6年度実施の県下の民俗芸能悉皆調査では、兵庫県内に250以上の伝承地があり、そのうち「播州獅子どころ」といわれる播磨に約140地区ありました。その多くは伊勢太神楽系の獅子舞(右図の●印)です。伊勢太神楽は、伊勢神宮の信仰が流行し始める中世末期から近世初頭にかけて伊勢神宮の神人が諸国を歩き、村の家々をお祓いした後、曲芸等を演じたことに始まります。その本拠は三重県の桑名で、各地では次第に奉納を受け入れるだけでなく、その技を学び、自らが村の祭礼で演じるようになります。2人立ちを基本にし、演目に共通性があるが、各地区毎に所作や獅子頭等に独自の工夫が見られます。但馬の北西部には、麒麟の頭を使用する麒麟獅子舞が分布しています。伊勢太神楽と異なり、曲芸的な要素が少なくゆったりとした動きが特徴です。



右上 大蔵谷西之組獅子舞
左・右下 大蔵谷の獅子舞



伊勢太神楽ササラ(榊) 剣(英賀) オヤマ(佐保)
継獅子(榊) 毛獅子(大塩) 麒麟獅子(浜坂)

